

神社のむかし、その昔

古代の神社を探ってみよう

「一、神社のルーツは何だったのか？」
依り代とヤシロ

古来神々は、時として人間のそばに現れ、やがて神の世界へと帰っていく「動く存在」と信じられていたようです。そのときの神の依り代(神々の現れる場所・もの)としては、山、川、海、泉、滝、巨岩、草木などの自然や、鏡、剣、玉など、さまざまなものが考えられます。この依り代がやがて、「ヤシロ(屋代)神の住む所・もの(社)」と呼ばれるようになったのではないのでしょうか。つまり依り代こそが、ヤシロ神社のルーツと考えられます。



虹の滝(平田市・宿奴神社裏)
『出雲国風土記』に登場する宿奴神社の裏にあり、現在も滝の神であるタキツヒコノミコトを祀っている。こも神の住むヤシロの原型と言えるだろう。

神社の誕生

近年の発掘調査の成果は、「神社を想像させる建築」が弥生時代から存在する可能性を指摘しています。しかし、それらが実際に『神の住まい』としての神社であったかどうかについては、まだ説明されていません。「神社」と呼ばれる神の住まいが造られ始めるのは、古墳時代の終りごろから奈良時代にかけてと想像されます。こうして神は、「動く存在」からその地域に「とどまる存在」となっていくのです。神の世界と人間の世界を行き来していた神々に、住まいが造られるようになった理由の一つには、仏教が伝来し、寺院が建立された影響も少なかつたと思われています。

「『出雲国風土記』が語る社と祭場」
その数二九九を数える出雲の神

古代の社や神社の初期の姿を、私たちは全国で唯一、完全な内容を残す奈良時代の地誌『出雲国風土記』(七三三年完成、以下「風土記」とする)の中に、垣間見る事ができます。



出雲国の土馬(県内各地の出土品)
風土記が編まれた8世紀前後の代表的な祭祀遺物で、集落や泉の中から発見される。神の乗り物として、神前に捧げられたものであろうか。出雲国の土馬は、その姿がリアルで知られる。

「風土記」によると、奈良時代の出雲国には、神の社が実に三九九あったとされます。当時は、一社に一神が祀られていたようです。出雲国には三九九もの神々が鎮座していたこととなります。この三九九の神々はそのような姿で祀られていたのでしょうか。

森も社

「風土記」の中には、木や森そのものを神の社とした例が見られます。たとえば秋鹿郡(松江市北西部から平田市東部)にある女心高野(女心高野)という山は、「ただ、峯のところに樹林があるが、それは神の社である」とあり、森も社として扱われていたことがわかります。同じく意宇郡(松江市南部を中心とする地域)の地名由来で、「田の中の木が茂った小山」を「意宇社」と呼んだとあり、まさに祭場を思わせませう。



風土記の時代の祭りの道具?(松江市・オノ峠遺跡出土)
ミニチュア土器をはじめ、土製の玉や鈴、鏡形、土馬、石製の紡錘車、石鈴、水晶製の丸玉、木製の船形、琴柱など奈良時代の多種多様な祭祀遺物。これらはムラ境の峠の周辺から出土した。境の神(オノの神さん)を手厚くお祭りののだろうか?

巨大な神「カンナビ山」

カンナビ山(神名槌野)「神名火山」などと書くことは巨大な山そのものを神の依り代として信仰することから生まれたもので、「神の降る山、神の宿る山」という意味です。「風土記」には、四つの山がカンナビ山として登場し、その周辺には祭祀遺跡や古い神社が今でも数多く残っています(詳しくは五巻を参照)。

今日に姿を残す「石神」信仰

神社が生まれる以前の神祭りの姿を端的にあらわしたものに、石神があります。「風土記」には、楯縫郡(現在の平田市付近)のカンナビ山(現在の大船山)に、「石神あり」と記載され、石には多伎都比古命の御魂が宿り、日照りにかからず雨を降らすとされています。

今も「帯には」若船」「鳥帽子岩」と呼ばれる大小の岩石や、多伎都比古命を祀る滝が見られ、弥生時代末から古墳時代の土器を出土する祭祀遺跡も知られています。

今日でも、石を依り代として祀る例は、身近にたくさん残っています。その多くは大きな石を神として祀られていますが、いずれも古代の信仰と神社の古い姿を物語る歴史のあかしなのです。



石神(平田市・大船山の鳥帽子岩)
『出雲国風土記』に登場する、タキツヒコノミコトを祀る岩。高さが約3mもあり、「イワクラ」と呼ばれる神の宿る巨岩である。まさに神社のルーツにふさわしい。今日に至るまで、日照りの際、雨を降らせると信じられてきた。

神名火山(斐川町・仏経山)
カンナビ山とは、神の宿る神聖な山を言う。この山は、広大な出雲平野一帯からその頂を望むことができる。『出雲国風土記』によれば、この山の峰に神の坐すヤシロがあった。

四つの大神

「風土記」には多くの神々が登場しますが、その中に佐太大神、野城大神、熊野大神、所造天下大神のように、「大神」を付けて呼ばれる神々が登場します。それらは今日で言う、佐太大神(八束郡鹿島町)、野城神社(安来市)、熊野大神(八束郡八雲村)、出雲大社(簸川郡大社町)にゆかりの神々です。これら四大神が存在する背後には、おそらく有力な言や権力、あるいは霊能力を持った人びとの集団(祭祀集団)が、出雲国内で四地域に分かれて存在していた歴史を反映していると思われれます。

